

# 関東における日本語方言境界線から見た 河川地形名の重層とその背景

安部 清 哉

キーワード：言語地理学，河川名，類別詞，奥東京湾—柏崎線，モンスーン・アジア

## 要 旨

日本語方言の重層性を，関東を横切る方言境界線と河川湖沼沢池地形名の分布から考察し，方言境界線の成立要因を明らかにして，古い日本語の背景としてモンスーン・アジア（M. A.）領域の言語特徴を考慮する必要があることを述べた。

全体としては次のことを指摘した。①河川名や湖沼沢池名には分布範囲の異なる新旧の相違がある。②その境界線は「奥東京湾—柏崎線」「柏崎—銚子構造線」「利根川」等の複合的自然境界による。③この境界をもつ方言分布は縄文時代以来直接的間接的にその影響を受けてきた。④河川名タニよりも古い分布としてナイがあり，それは東アジアに連続し M. A. 領域にも周圈的に分布する。⑤M. A. 領域内には類別詞など共通する言語特徴が認められる。⑥M. A. 文化領域の形成は旧石器時代にまで溯り，言語だけでなく気候・文化人類学的諸特徴相互の関連性が極めて高く，文化人類学的にも注目すべき領域である。

## 1. 日本語における方言境界線「関東・越後線群」の位置的問題

日本語方言には，所謂糸魚川・浜名湖境界線（以下，糸浜線）とは別に，関東から越後にかけて収束する方言境界線が認められる（図1）。<sup>注1</sup> 筆者は，これら境界線を仮に「関東・越後線群（関越線）」と名付け（安部1997.8），様々な角度からその解釈が続けているが（参考文献参照），関越線は，その量と質において糸浜線に劣らず多種多様であるという点で，方言上も日本語史上も重要な研究課題と考えられる。

関越線における不思議な点は，①糸浜線が日本アルプスという明瞭な地理的障壁を背景にもつとは異なり，せいぜい利根川程度しかその地理的理由を見出せないという点である。下流を別とすれば，利根川程度の幅の河川は少なくないにも拘らず，他ではこのような境界線は見出しにくい。また，②上代の東国資料において，関東ではむしろそれより西の関東平野西側での相違が指摘され（大野晋1962など），時代を溯った場合に指摘されている境界とは必ずしも一致しないという点や，③個々の方言事象での境界線の相違が少なくなく幅があるという点も問題であった。さらに，共通の位置的な背景が

ある場合、④その東西での相違がどのような意味をもつのか、という点も課題であった。本稿では、まず位置的な問題を考察し、次に河川地形名を解釈の糸口として、関越線の成因とその背後にある日本語古層語の問題について考察してみたい。

## 2. 関越線の中の2つの境界線の前後関係

関越線をもつ言語地図を解釈していくと、時代による位置の相違が指摘できる。

安部(2002.5)において、『日本言語地図』LAJ 155・156によって作成した「糸」を表す言語地図を解釈したが、その関東における分布境界線には前後関係がある2つの境界線が認められた(図2)。1つは、ソが関東で色濃く残存する範囲(ヌイ<sup>注3</sup>ソ+イト<sup>注3</sup>ソ領域)と、新しく東日本に東進してきたイトがそれ以前の古いソの分布を一掃したイトの単独分布範囲とがつくる、関東西側丘陵沿いの境界線Aである。もう一つは、イトが入る前のソ単独使用の段階を示すと考えられた北関東ヌイソと、新しいイトがさらに南関東のソの領域まで東進しソと複合した段階(まだソを一掃してイト単独段階には至っていない段階)を示す複合語イトソとがつくる、利根川沿いの境界線Bである。これらは、ソ(旧)とイト(新)の言語地理学的新旧関係からも、西側のA線が先にでき、イトの東進によって利根川沿いのB線が後に生じたと解釈できた。つまり、古い境界線は東京・埼玉・群馬の西側の丘陵沿いにあつて、後に利根川を境界とする位置に移動したと解釈できた。関越線の中に時期が異なる2つの境界線があり、その位置が推移したと解釈できるとすると、疑問点②③が解釈可能となるばかりでなく、これまで明らかにされてこなかった様々な分布の問題が新たに解釈可能となる。次に河川地形名(以下、河川名と略す)を取り上げ検討したい。

## 3. 河川地形名「タニ」と湖沼地形名「イケーサワ」「ヤチ」等における分布境界線

著名な河川名タニ(図3)には関東に境界線が認められ、一連の関越線を解釈する一つの糸口となるので取り上げてみたい。

上代から例のあるタニは、これまでサワ(サハ)と東西対立をなす語と考えられてきた。しかし、①朝鮮語(韓国語・北朝鮮語、以下同じ)との同源(新村出1916)が指摘されるタニは、中部地方など東側にも分布する、②サハは既に上代に中央(西日本)でも使用され東日本のみの語形とは限定できない、③タニには他の関越線と共通する位置に分布境界がある、などから、サハとの東西対立と見るべきでなく新旧の関係と解釈された(安部1998.3b)。その東側の主要な境界(図3の太線)は——関東平野部で谷状地形が少ないことは考慮されるものの全国の分布から見て——むしろ関越線付近にあると見なすことができる。さらに細かく見れば、関東側は西側丘陵沿い(A線とその南への延長)と概略重なるものの(後のイケの境界も参照)、北陸側ではむしろB線の延長線や図1の最も太い境界線に近く、単純ではない。これは、初めA線の分布だったものが、

その後谷状地形の多い北陸側でB線の方に拡大したものと解釈できよう(後述するように、ここでもA・B間での移動やずれ幅を考慮する必要があることがわかる)。

一方、古くから東西日本で使用されたサハは、上代では川に限定されず湿地・沼沢の意も見られ意味が広い(『時代別国語大辞典上代篇』)。上の①の語源説などを考慮すれば、外来の新語タニが西から谷川名として拡大しいずれかの段階で地名に定着していったため、やや広い意味をもったサハは西では谷川に限定された地名としては定着できず、タニの伝播が遅れた(東側で少なくなる)東日本でのみ谷川の意で(も)定着したものと解釈できる。イトの場合と同様、西から東進したタニの当初の前線は、A線とほぼ同じ位置を留めたとみなすことができる。その点は次のイケ等との一致からも補強される。

タニと同じ境界線をもつ地形名にイケ・ヌマの湖沼沢池地形名がある(図4)。共通点は、①人の生活に不可欠な水に関する言わば「水源地地形名」である、②境界線がほぼ一致する、③東に多く残る語形(サハ、ヌマ)の方が地形名として東西で使用されている、④東に多く残る語形の方が古く、西に偏る語形(タニ、イケ)が新しいと解釈できる、⑤西の語形が外来語タニや、稲作との関係が考えられる灌漑用水技術「溜めイケ」(『時代別国語大辞典上代篇』)など、西からの文化的伝播と関係する、などである。同じ境界線をもつ分布に、類似した成因が認められるから、この位置での境界線にはある程度何らかの共通する背景があったことがうかがえる(その点はさらに同様の水源地地形名によっても補強<sup>注4</sup>できる)。ここでは、地形名分布と方言分布との強い相関性と、意味的な類似地形名に認められる共通性を新たに指摘したことになるが、このような特徴から見ても、この位置での境界線形成の要因が改めて問題になってくる。

ところで、いま方言境界線の問題から関連事象として地形名を取り上げた。方言と地名(地形名)はある部分では関連するものの、地名を方言地理学的資料として見る場合、名付けやその語源、定着の理由・過程・時期、また行政的制度等の面も加わり複雑である。分布形成の問題となると、当然ながら方言とは同列には扱えない側面がある(そのような問題については安部1998.8で触れたことがある)。しかし、境界線の位置とその位置での新旧関係という問題に限るならば、地形名分布と方言分布とは関連する現象と考えられるので、その範囲でこれらを同様に扱って検討していくことにしたい。

#### 4. 関越線群の地理的背景とその形成時期

さて、方言も水源地地形名も古くは上記の位置に境界が生じていたとすると、次に問題になるのは、現在特に地形的障害が見られないその位置に多くの境界がある理由である。これまでの拙論でも要因となり得る現象を指摘してはきたが、資料が十分でなかったことや上記のような境界線の時代的相違がまだ明らかでなかったこともあり、関連性が十分考察できなかった。ここで新しい資料を補って改めてこの問題を検討してみたい。

糸浜線がフォッサ・マグナを背景にしていることから推して、まず地形的障害が疑わ

れ、かつて位置的に近似する地質構造線として「柏崎—銚子（構造）線」を探し出して指摘したことがある（安部 2000.1, 図5, 新妻信明 1991 掲載図がより詳細）。その位置は利根川よりも西寄りで、確かに一部の分布境界線と一致する。しかし、柏崎—銚子線は、①糸の A 線と水源地形名の境界に近いが、それらはさらに西側にあるように見える、②地形としては利根川の一部くらいしか障壁となるものが探せない、などの問題が残る、この構造線のみが要因とは見做しにくい面があった。さらに探索したところ、地理的に一致する「古・奥東京湾」を見出すことができた。<sup>注5</sup>

関東の地形を歴史的に溯っていくと、東京湾が内陸まで深く入り込んでいた時代があったことを見出した。今から約 7000～6000 年程前の縄文前期の「縄文最温暖期」における海面上昇により、「縄文海進」が最も進んだ約 6000 年前に最大に達するもので、その時期の東京湾は「(旧) 奥東京湾」(図 6 の斜線部分・図 7) と呼ばれる深い入り海をなした（江坂輝彌 1965 以降、春成・小池 1987、樋泉 1999 ほかの諸研究を比較参照）。奥東京湾はその後海退によって湿地から平野へと移行するが、江戸時代までその名残は各地に残った（日比谷の入り江等）。巨大な海や湿地は西からの言葉や文化的伝播を留める障壁になり得る。この奥東京湾の西岸線と利根川上流部と柏崎とを結ぶと一本の境界線を描くことができる（仮に「奥東京湾（西岸）—柏崎線」と呼ぶ）。この位置は、前述の A 線と水源地形名の境界線にほぼ一致する。①位置的一致、②奥東京湾が少なくとも 9000 年前から海退後の 4000 年前でもなお小さくない入り江であり（樋泉 1999、春成・小池 1987 参照）、海退後も海だった地域は湿地として残ったこと、③後述のようにこの位置が縄文時代から東西をわける境界線として機能していたこと、などから総合して、この奥東京湾—柏崎線が A 線等の要因となった地形的障害と解釈することができる。

次に問題となるのは、この奥東京湾—柏崎線の位置で方言上の境界が生じた時期である。ところで、イトの語源として朝鮮語の sil が指摘され（亀井孝 1953）、タニが上記のように朝鮮語と同源と目され、イケも水稻文化との関係も疑われるとなると、この位置での方言境界も弥生文化の東進に伴って形成されたもののように短絡的に推定されやすい。実際、新しい西からの文化の東進が多い弥生時代の影響は、関越線の語彙を見ても看過できない（アゼ畦、田を表す語彙、イト糸、ウシ牛、ハイ灰など文化的語彙が考慮される。安部 1991.8, 1996.3, 2002.7 参照）。しかし、方言分布や言語の解釈それ自体と、個々の語の文化的特徴や時代的相違との短絡的結び付けによる推定とは区別されるべきであろう。また、文献のない時代であれば、方言形成やその年代と直接的に関わり、その客観的証左となる具体的な背景を（後述のように考古学などの関連分野なども参考にし）明らかにしていく必要がある。

さて、この「奥東京湾—柏崎線」が 6000 年以上前（樋泉 1999 によれば 9000 年前にかなり内陸に及ぶ）まで溯る現象となると、方言境界線としても縄文時代を検討する必要がでてくる。しかし、縄文時代 1 万年間の日本語の変遷という問題は、日本語史研究に

においては文献もない全く未知の領域である。この新たに確認された東西方言境界線の生じた年代を明らかにするには、その方法も含め今後新たな視点からの検討が必要であろう。また、このような未知の問題を研究対象として客観的科学的に取り上げていくためには、通説や先入観によって言語と文化や時代が短絡的に直結されないよう注意して取り組む必要があろう。その意味で、ここでは、この境界線が（後代のものも含むであろう）弥生時代以降の形成であるとは安易に推定されない客観的な証左を挙げておくことが重要と思われる。個々の分布の具体的解釈は今後の問題とし、以下では、縄文時代におけるこの位置でのコミュニティの境界形成を一つ指摘しておくことにしたい。

図6は、縄文中期（約5～4000年前）の考古学遺跡「打製石斧大量使用遺跡と群集貯蔵穴遺跡」の分布図（今村啓爾1999）に、同じく今村1999が掲載する奥東京湾の「推定海岸線」を重ね合わせたものである。図6の2種類の遺跡の分布境界は、①時期が奥東京湾の最大時期と近接する、②位置が奥東京湾（西側）―柏崎線と（驚くほどよく）一致する、という共通点がある。この一致は偶然とは見做しがたく、図6の遺跡分布は奥東京湾に制約された蓋然性が極めて高い（この解釈は今村1999にはない）。今村1999は東西での主たる食物の貯蔵法と食物栽培の相違という広義の文化的相違を推定している。いずれせよ、この東西で少なくとも5000年前に食物文化ないしコミュニティが相違したことが指摘できるから、奥東京湾の最大規模の時期とその前後期間（6000年±最低?3000年前）に、この位置で方言の相違が形成され得る可能性が皆無でないことがわかる。さらに溯った時期についての調査も必要であるが、少なくとも、関東の境界線の形成を弥生期以降と限定してしまうことが適切でないことは明らかである。

以上、本稿では、拙稿で指摘してきた関東を横切る方言境界線を取り上げ、特にその位置・時期・形成要因に関する課題に対して新たに次の点を明らかにできた。①関越線群は、方言分布及び地形名分布の解釈から見て、「奥東京湾―柏崎線」+「柏崎―銚子構造線」+「利根川」という複数の地形的障害による複合的要因によって形成された。②特に「奥東京湾―柏崎線」は縄文時代まで溯りかなり長期間にわたって影響が大きく残った。③それらの位置と影響力は、それぞれの地形変化に伴って時期的に推移し、「奥東京湾」の消滅などによってしだいに東進した（方言分布で主に利根川（B線）に収束するものもそのような時代的移行と解釈できる）。④そのため、個々の境界線の位置も、形成時期や文化的背景によって多少の幅が生じた（A線B線間での相違やずれも時期的相違の投影と考えられる）。⑤境界線形成の文化的要因の一つとして、西からの新しい文化的伝播が影響したことが認められる。⑥総合的に見て、この境界線での東西の相違を弥生文化以降のものとのみ限定してしまうのは適切ではない。

よって、この境界線は、自然地形を要因とする方言境界線として、方言研究上今後「糸浜線」を取り上げるのと同様に重視され考慮されるべき境界線と考える。

本稿はここまでで一旦結びとしてもよいのかもしれない。しかし、では奥東京湾の形

成よりも古い段階の方言は、どのような側面をもつ日本語であったのだろうか。そのことに触れておくことは、この境界線の評価と解釈にとっても、また、この境界線の東西日本語をより客観的科学的に研究していくためにも必要であると思われる。その理由を詳述できる紙幅はないが、簡略に挙げておけば、①一つは一連の拙論において、これだけ多種になる関越線群を取り上げてきているにも拘らず方言研究において問題として全く言及すらされない状況にあること（同様の境界を見出しても）、②いま一つは関越線群の東の語法・語形の基層語、ひいては日本語の基層語<sup>注6</sup>は、後述のモンスーン・アジア地域の基層言語に通じる可能性があるからである。特に、後者のことを示すためには、現在の研究状況においては極く限られた言語現象のみの指摘では不十分であり、第6節のように関連現象全般にわたる提示が必要かつ有効と考える。以下、限られた紙幅ではあるが、要点を絞って述べてみたい。

## 5. 河川名に投影する古層語分布とその背景

先にタニ・イケなどの地名が関東以西に偏ることを見た。一方、東に偏在するものの上代文献にも確認できるサハとヌマは東西日本で使用され、タニ・イケよりも古い語と考えられた。これらには新旧の相違があることになる。これらや「糸」の解釈より推して、関越線をもつ方言分布は（個々の検討は必要であるが）少からぬものが、古く東西に分布した語の上に西からの新しい伝播が重なってできたものである蓋然性が高いと考えられる。では、関越線群の東に色濃く残る古い語法・語形はどのような性格の日本語であり、それを考えていくためにはどのような範囲まで考慮していったらよいであろうか。その点を、同じ河川名ナイを手掛かりに検討していくと、以下のように「モンスーン・アジア領域」の基層語まで通じている可能性が指摘できる。

サハ・ヌマなどの語源も関連する興味深い問題をもつが、<sup>注7</sup>ここでもう一つの河川名ナイを取り上げるのは、①ナイは近隣言語に類似語形が多く、②河川名は日本・中国・朝鮮半島でも偏った興味深い分布を示し（安部 2001.8, 2001.11）、③欧州やシベリアでの研究でも言語史研究上の意義が指摘され（同上）、④スワデッシュの基礎語彙表にもある語で、総合的に見て古層言語の検討材料として重要であるからである（ナイの先行研究を検討することは本稿での目的ではないので省略する）。

近隣の関連言語からナイに類似する語形を探すと、図8の言語地図とそこに掲げた語彙表<sup>注8</sup>が得られる。地理的に近接するアジアの言語において、一河川名がこれほど類似することの指摘は管見の限りではこれまでない。これらの言語では比較言語学上の系統関係が認められていないから、ここでは、これらの語形に関連があるか否かというような所謂比較言語学的考察は一旦保留し、言語類型地理論的観点から検討してみたい。なぜなら、①1語だけで系統未詳の諸言語間の単語比較を論じても現段階では意味をなさないというほかに、②ABE 1999.8, 安部 2001.8・2001.11で検討したように、東アジア

の河川名の分布範囲は方言・気候・文化とよく一致するという特異な特徴が認められ、③欧州・シベリア・韓国の河川名研究では方言分布などとの強い相関性が指摘されているからである。②③からは、図8の周囲の分布に意味があった場合、この領域に共通する言語的特徴が見出せる可能性が高いと予想された。実際に次章の手順で探ったところ、共通する「類別詞」を捜し出すことができた。<sup>注9</sup>

## 6. 「モンスーン・アジア Monsoon Asia」という文化領域

図8のナイ<\*ナリ (<\*nahdi) は、東アジアは隣接しているが南アジアの分布はかなり離れており、この2地域を直接には結びつけ難いように見える。<sup>注10</sup>そこで、まずこれらの地域で言語的共通性を生み出し得るような共通する気候的特徴と文化的特徴を探してその領域を確認し、その領域に分布する言語特徴を探すことにした(具体的には ABE 1999.8, 安部 2001.8 などの応用であるが詳しくは省略する)。以下、それら関連現象の分布を簡略に挙げる。

河川名ナリの分布範囲は気候条件「7月平均降水量100ミリ以上」の範囲(図9, 安部 2000.12)に含まれる。それは「モンスーン・アジア(M.A.)」と呼ばれる気候領域でもある(安部 2001.8, 図省略)。気候が共通する地域では動植物と文化がその影響を受ける。また、河川名分布と気候が一致する領域では言語的共通性が見られる傾向が強い。ここでも同じ範囲に「類別詞」を見出すことができたが2つの領域は極めてよく一致する(図14)。<sup>注11</sup>河川名一語と類別詞では言語史研究のための状況証拠として弱いので(安部 2002.11)、この領域で語彙や類別詞という形態法が共通することになる文化的裏付けを得るために、さらにこのM.A.領域内で一様に共通する現象、あるいは、近似する境界線をもつ現象を探ったところ、以下のものが見出された。<sup>注12</sup>

### 《「モンスーン・アジア領域」の文化人類学的諸特徴》<sup>注13</sup>

- ①アジア・太平洋地域における夏季7月の降水量100ミリ以上の領域(図9)
- ②気候区域としての Monsoon Asia 吉野正敏 1999 (図は安部 2001.11 参照)
- ③アジアの植物区系 図10
- ④中国の農耕領域 大林太良 1986 (図は紙幅の関係で省略、付記予稿集参照)
- ⑤ヤムイモ(温帯種・熱帯種)の分布 図11
- ⑥サトイモ科の分布領域 堀田満 1974 (図は省略、同上)
- ⑦ハツカネツミ(キャストネウス型, Hbb-d型を含む)の分布 図12
- ⑧トラの本来的生息地域 IUCN 1996 <sup>注14</sup> 図13
- ⑨酒類分類における麴発酵酒+唾液発酵酒の分布 中尾佐助 1967 (図は省略、同上)
- ⑩「類別詞」Classifiersのアジア・太平洋での分布範囲 Aikhenvald 2000 図14
- ⑪オーストロネシア語の源郷と拡散地域 図15
- ⑫旧石器時代の chopping tools (打製石核石器群)の分布領域 図16

この領域は、気候・動植物・主食作物・人間に関わる文化等が一定の境界線を伴ってある程度共通して存在している特異な領域であることがわかる。このような領域は文化人類学の研究を見ても世界的に指摘がない（仮に「M. A. 文化領域」と呼ぶ）。重要な点は、この領域の形成時期が特定できる考古学データとして⑫旧石器時代の chopping tools（打製石核石器群）（R. ルーウィン 2002）の分布が得られたことである。旧石器時代（の少なくとも終わり）には人が類似道具を共有する一定領域を形成していたことになる。総合的に見ると、M. A. 文化領域では言語的特徴も含め相応の古さが推定される、強い歴史的文化的関連性が認められることがわかる。

さて、世界的河川名研究を応用し、2地域に離れたナリの分布からそれをつなぐ類別詞という言語現象と M. A. 文化圏を見出した。勿論このことによって、直ちにナリの同源関係が証明され類別詞も旧石器時代まで溯る、ということにはならない。言語それ自体は言語学的検討を経なければならない。その言語の問題に戻れば、類別詞の様な分布は、これまで系統論上異なるものでしかなかったこの領域の言語に、知られていない共通性質が備わっていることを示し、それは環境ないし人間活動と関わっている古い性質である可能性があるとして解釈できる。一方、ナリはそれらが同源関係にある可能性が皆無でないことになろう。

このように、類型的共通性質が見られること、同源の可能性のある単語が周囲の分布をするということは、日本語（とアジアの諸言語）の言語史上考慮し比較しなければならない言語領域が、これまでの世界的言語研究の大方の予想を越えて、はるかに広がっていることを意味している。畢竟、本稿での関越線群の考察によって、今後個々の方言分布解釈において、ひいては日本語史の研究においても、その基層語として、この M. A. 領域の言語をも視野に入れていかなければならないことが明らかとなった。

## 7. おわりに——異文化接触による日本語の重層とその背景

本稿では、関東の方言境界線を検討して、その成因となった「奥東京湾」ほかの古い地形的障害を明らかにした。大陸文化や南方文化からの直接間接の影響を長期に不断に受けたであろう西日本から伝播してくる新しい文化の東進は、縄文時代に現れる「奥東京湾」等によってその西側で一時的に遮られ、その東側では、その障害が消えるまでかなり長く伝わりにくかったものと考えられた。その意味で、新しい異文化に晒され続けた地域と、いまは消滅した地形のために、その異文化接触が遅れがちだった地域の相違が、この方言境界線（の一部）をつくってきたと言えよう。

さらに、関越線より西側の、縄文前期以降という、想像以上に長期に亘って幾重にも重なってきたらしい西側日本語の諸相を取り除いて日本語を見てみると、これもこれまで考えられてきたものとは全く異なる日本語の広がりが見え、M. A. 文化領域までつながっている可能性がうかがえた。モンスーン・アジアという領域は、世界の言語史

研究でも（考古学でも文化人類学でも）、まったく未知の領域である。それゆえ、ナリ相互の関連にしても、類別詞の分布の言語学的意味にしても、その言語学的解釈は、他の言語現象をも併せて今後の批判的検討を経なければならない。

翻ってわれわれは、この M. A. 文化領域の言語に、これまでの日本語の系統論研究史上の同系候補がほぼ過不足なく含まれていることに気付く。これは果たして単なる偶然なのであろうか。——譬えれば、ある人は、その鼻にさわって象と言った。ある人は首を撫でて麒麟といった。またある者はその文様を見て虎に似たりと見てとった。ある人は尻尾を握って蛇と言ひ、背中をさすって亀と、その鬣を獅子と……。そのいずれもが、実はそれぞれの視点から考察した日本語の系統の正しい一面だったのではないか。ただ、その全身の姿はこれまでの誰もが名を聞いたことも目にしたこともないものだった。——そのような場合があり得ないとは言ひ切れまいであろう。これからは、新しい視点からこの領域の中の日本語史を考えていかなければならないと思われるのである。

注 1 該当する項目は、既に拙論で何度か取り上げており（安部 1997.8・1998.5・1999.9 a 参照）、紙幅の関係もあるので図を示すに留める。図 1 の番号（29 項目）は安部 1999.9 a 参照。これらのほか、安部 2001.4 の「カハツの言語地図」「月（ノンノ系）の言語地図」、安部 2002.7 の「田一集合」、永田高志 2000 の「自然物敬語」、先行研究によって挙げた安部 1998.5 の「助詞～サの用法」（小林隆）「可能動詞（A 型可能）」（渋谷勝己）、同じく安部 2000.11 の「対象格としてのコト・トコ」（日高水穂）、本稿のイケエヌマ、ヤチ、アクタほかの地形名が該当し、現在合計で 40 項目ほどになり、数の上で糸浜線を大きく上回る。

注 2 歴史的に弥生・縄文時代等に溯る場合、「日本語」「方言」の定義が問題となるが、ここでは日本列島上の言語とそこでの相違という程度に緩く扱っておきたい。安部 2002.11 も参照。

注 3 「糸」のソの分布は、安部 2002.5 で紙幅の関係で割愛した『日本方言大辞典』によれば多少異なり西日本の分布が広いが、全体としての結論に変更はない。

注 4 水に関わる地形名は同じ位置に境界線をもつことが推定された。鏡味完二 1958 によって探して見ると、湿地地形名の①ヤチ・ヤツ・ヤト（湿地、語源は \* yat か）②アクタ・アクツ・アクト（低地・低湿地、同様に \* akut か）、③ニタ・ヌタ・ムタ（湿地、第 1 音節 i-u の境界）には同様の境界が確認できた（詳細は別述予定）。「水源」という意味的に共通する地形名が類似する分布境界線をもつという指摘はこれまでに見られない。

注 5 「奥東京湾」は安部 1998.3 a で理由の一つとして挙げているが、客観性を期してより新しい複数の研究を確認する必要があった。今回柏崎―銚子線（そこでも海進期に「古・鬼怒湖」（江坂 1965）とも呼ばれる大きな地理的障壁を形成している）や利根川とも比較し、改めてこれら複数の要因の複合と解釈したものである。

注 6 印欧語の祖語が 5000～6000 年前、オーストロネシア語の太平洋への拡散が約 6000 年前（図 15）、中国の甲骨文字が約 3500 年前、中国最古の河姆渡文化が約 7000 年前と推定されている。これら以上の 6000 年前を溯った段階は、世界の言語史上でも未知の時代である。縄文時代のある日本語方言において、このように年代を区分できる方言境界線が見出せる

言語学的意義は決して小さくないだろう。

注 7 各語の語源は、タニは新村出 1916、イケは「生ケ」とする『岩波古語』、ヌマは泥との関連に触れる佐竹昭広 1955 (アイヌ語、朝鮮語、蒙古語が指摘され、ナイとの類似点として注目される) があり、サハは安部 2001.11 でオーストロネシア語との類似を指摘した。

注 8 手順を簡略に記す。①まず 3 言語での語形を網羅した。アイヌ語はナイ、日本語では琉球方言のナイ (ヒナイ川) のほかにナ (『万葉集』3401「中麻奈」ナグマ・ナ) が指摘される (都竹通年雄 1953)。朝鮮語では nari, \* nai, \* na, naih, nara が指摘され (金芳漢 1985)、現代語 ne がある。[なお、都竹 1953 では「千曲川の事であり、このナはアイヌ語の川という意味の語根が地名に残ったものであろう。」とし、ナ・イと見ているようであるが、ナイからの短縮形ともとれる。このナをセナ・イモノロ、朝ナタナのナと同様の接尾語と見る解釈もあるが、接尾語が普通名詞や時の名詞でもなく、固有名詞である地名に付く例もないこと、[~富士] のような一般称的に使用される地名でもないこと、から接尾語説は取り難い。] ②これらから祖語形を仮に \* nari とした (以下ナリとする)。③これらを視野に入れて近隣言語と日本語及び朝鮮語との関連が指摘されるドラヴィダ語及びそれに隣接しドラヴィダ語よりも古いとされる (『言語学大辞典』) ムンダ諸語を辞書などから探したものである (安部 2001.8、当然ながら各言語での方言形や古さ等は検討課題である)。[なお東南アジアの言語は未調査。nadi (ネパール語ほか)、nahr (アラビア語) など西に続く言語があり要検討であるが (< \* nahdi), 図 11 のように西へ広がる可能性はある。]

注 9 偶然というよりこの M.A. 文化領域の特徴と言えよう。先行研究のある欧州やシベリアの水源地名分布も、気候や文化領域との関連から改めて検討する必要があるだろう。

注 10 東アジアのナリは南アジアとは別で、むしろアルタイ語に属する語形という見方も検討された。しかし、このナリと同源と考えられるナは非アルタイ語と考えられている (板橋義三 2001 及び付記発表での配布資料 <http://www.page.freett.com/abeseiya/> 掲載参照)。

注 11 西光義弘 2001 の発表資料で見出した。国内初紹介か。

注 12 それぞれの研究の客観性に関しては、国際的研究水準①⑧あるいは科学的分析⑦によるデータであるもの、複数の研究が検討されているもの②、関連分野で一致するもの (③と④、⑤と⑥)、他の研究でも概略解釈が一致していたもの⑩⑪など研究水準を可能な限り検討した。幾つかの図は紙幅の関係で省略した。付記の発表予稿集か安部 HP 参照。

注 13 各地図については簡略な解説を付す。①降水量 100 ミリ線は大陸・太平洋とも他の境界線とよく重なる。②大陸部のみで複数の説があるがおよそ一致し、特に動植物③④⑤⑥⑦⑧や⑩の境界と最も重なる。⑩インドはアーリア系言語の侵入が考慮されるもので、大陸部は②ほかとよく一致する。太平洋の点にはそれに連続し、南北アメリカはそれらの拡散によることも考慮される (例えば南米は⑪の図参照) ③欧州シベリア・西アジア中央アジア・アフリカ印度砂漠の乾燥地帯の区系との間の境界線が一致する。④中国の農耕領域は M.A. や③と一致する。⑤温帯種・熱帯種を合わせた範囲が北部での分布はないが⑨⑫に近い。⑥北の限界線が一致し、バイカル湖に延びるがその点は⑦⑧と類似し、血液分析による日本人のバイカル湖起原説とも関わる分布を示す。⑤⑥の主食となるイモは栽培可能範囲内で携行し移住を可能とする食物として注目される。⑦キャスタネウス型はその Hbb-d 型を含めると類似の分布と見なせる。⑧虎の本来の年間生息地域である横線範囲は気候や植生と一致する。⑨唾液発酵酒は古代日本にも大陸にもあり、麴発酵酒と連続する

- ものと解釈され、合わせた範囲が⑤ヤムイモや⑫旧石器に近い。⑪オーストロネシア語の源郷は台湾やその対岸の東南アジア付近でそこからの拡散ということではほぼ定説化している。⑫旧石器には西のハンドアックスに対してアジアでの chopping tools の領域がある。
- 注 14 トラの原典論文は阿部勝彦氏(上野動物園飼育課)にご教授を乞うた。感謝申し上げます。
- 注 15 M. A. 文化領域の北部での当該現象の有無は漸移的勾配 Cline をなすと解釈される。
- 注 16 言語的に共通する特徴や単語はほかにも指摘できる。機会を改める。
- 注 17 ノストラティクス論やユーラシア大語族説などとも関わる問題は機会を改める。

## 参考文献

- ABE Seiya (1999.8.5) 'Climate, Culture and Language', (cf. Proceedings & hand outs, 12th World Congress of Applied Linguistics (AILA '99 Tokyo), August 1~6, Waseda Univ., Aikhenvald, Alexandra Y. (2000) Classifiers, Oxford University Press.
- IUCN (1996) Wild Cats, IUCN, Switzerland, Kristin Nowell & Peter Jackson edit.
- 板橋義三 (2001) 「アルタイ諸言語(含朝鮮語)と日本語」『言語研究』120
- 今村啓爾 (1999) 『縄文の実像を求めて』吉川弘文館
- 江坂輝彌 (1965) 「縄文時代の生活と社会——生活の舞台」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房新社, 江坂 1943・1954 等もあるが省略。
- 大野 晋 (1962) 『万葉集四』日本古典文学大系, 岩波書店
- 大林太良 (1986) 「東アジアの文化領域論」埴原和郎編『日本人の起源』小学館
- 鏡味完二 (1958) 『日本地名学 地図篇』日本地名学研究所(地名地図はこれによる)
- 片山一道 (1996) 「アメリカ大陸とオセアニアへの拡散」『人類史をたどる』朝倉書店
- 亀井 孝 (1954) 「ツル」と「イト」『国語学』16, 初出英文論文は 1953
- 北村四郎 (1957) 「植物の分布」『原色日本植物図鑑 草木編 [I]』保育社
- 金 芳漢 (1985) 『韓国語の系統』三一書房
- 佐竹昭広 (1955) 「古代日本語における色名の性格」『国語国文』24-6
- 新村 出 (1916) 「国語および朝鮮語の数詞について(承前)」『芸文』7-4
- 鈴木秀夫 (1978) 『森林の思考・砂漠の思考』日本放送出版協会
- 都竹通年雄 (1953) 「巻十四の『中麻奈』」『万葉』9
- 樋泉岳二 (1999) 「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民族博物館研究報告』81
- 中尾佐助 (1966) 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 中尾佐助 (1967) 「農業起源論」『自然——生態学的研究——』中央公論社
- 永田高志 (2000) 「方言に見る第三者に対する待遇表現」『20 世紀のフィールド言語学の軌跡』
- 新妻信明 (1991) 「丹沢の衝突」『南の海からきた丹沢』有隣堂, 柏崎一銚子線掲載
- 西光義弘 (2001.6.9) 「類別詞の理論的考察」(文部省科学研究費特定領域研究(A)公開講演会「消滅に瀕した言語」発表資料)
- 春成秀爾・小池裕子 (1987) 『1/400 万先史遺跡・環境図解説——縄文時代』『日本第四紀地図』東京大学出版会
- 堀田 満 (1974) 『植物の分布と分化』三省堂
- 前川文夫 (1977) 『日本の植物区系』玉川大学出版部

- 森脇和郎・米川博通 (1993)「遺伝子から見たアジア産ハツカネズミ亜種の分化と分布」『日本人と日本文化の形成』朝倉書店
- 吉野正敏 (1999)「モンスーンアジアの環境変化と稲作社会 (副題略)」『地理学評論』72 A-9
- R. ルーウィン (2002)『ここまでわかった人類の起源と進化』てらべいあ
- あべせいや (1997. 4)『日本語のルーツを探ったら』アリス館
- 安部清哉 (1991. 8)「数える」「哇」『方言の読本』小学館
- 同 (1996. 3)「古い方言と新しい方言の問題 [付注版]」『玉藻』31
- 同 (1997. 8)「もう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”」『玉藻』33
- 同 (1998. 3 a)「日本列島上の歴史と文化におけるもう一つの東西対立境界線“関東・越後線群” (副題略)」『フェリス女学院大学文学部紀要』33
- 同 (1998. 3 b)「日本語におけるもう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”——『広日本——中日本対立分布』=地図集 (言語篇2)」『立正大学国語国文』36
- 同 (1998. 5)「言語地理学から見た方言境界線“関東・越後線群”と方言区画論」『国語学会平成 10 年春季大会予稿集』
- 同 (1998. 8)「日本列島上の歴史と文化における分布境界線“関東・越後線群”——人類学・考古学・民俗学・気候学篇=地図集II——」『玉藻』34
- 同 (1999. 5)「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18-5
- 同 (1999. 9 a)「古代日本語における古い語彙・音韻と新しい語彙・音韻の言語類型論的比較研究の可能性」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』明治書院
- 同 (1999. 9 b)「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35
- 同 (2000. 1)「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』824
- 同 (2000. 11)「日本語史研究の一視点」『国語論究 8 国語史の新視点』明治書院
- 同 (2000. 12)「比較語彙研究の諸相と広がり」『比較語彙研究の試み 6』
- 同 (2001. 4)『日本語の歴史地理的研究』私家版
- 同 (2001. 8)「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本學會 (KAJA) 第 63 回學術大會 Proceedings』
- 同 (2001. 11)「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37
- 同 (2002. 5)「方言地理学から見た日本語の成立」『方言地理学の課題』明治書院
- 同 (2002. 7)「田一集合」『お国ことばを知る方言の地図帳』小学館
- 同 (2002. 11)「日本語はいついつ頃から使われているの?」他『日本語学』21-14

【付記】 ①本稿は 2002 年度秋季国語学会 (徳島大学) におけるポスター発表をもとにし後半を簡略化したものである。予稿集地図と当日配布資料は、<http://www.page.freett.com/abeseiya/>参照。②編集委員会の御助言に感謝申し上げます。③本稿は日本学術振興会平成 13・14 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) (課題番号 13610492, 代表者: 安部) による研究成果である。

図1 方言境界線「関東・越後線群」

安部1998



図2「糸」の地図と2つの境界線 安部2002

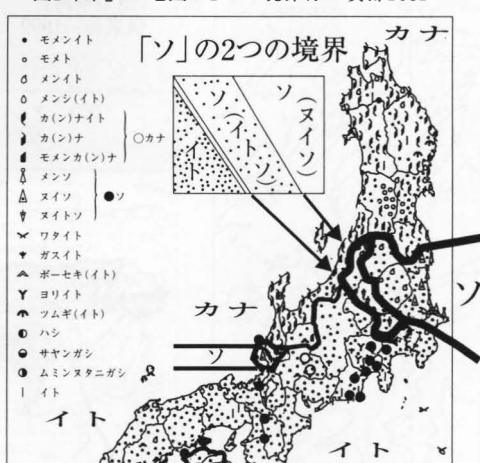


図3 河川名の語尾「～谷」

原図：鏡味完二 (1958)  
[鈴木秀夫(1978)より]



図5「柏崎-銚子線」

前川文夫1977

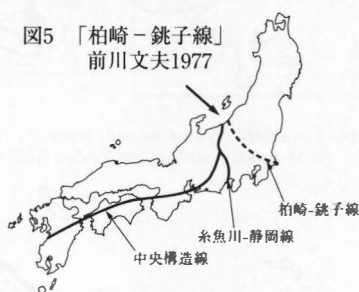


図6

打製石斧大量使用遺跡(●)と群集貯蔵穴のある遺跡(○)の分布(縄文中期～後葉) 今村啓爾1999

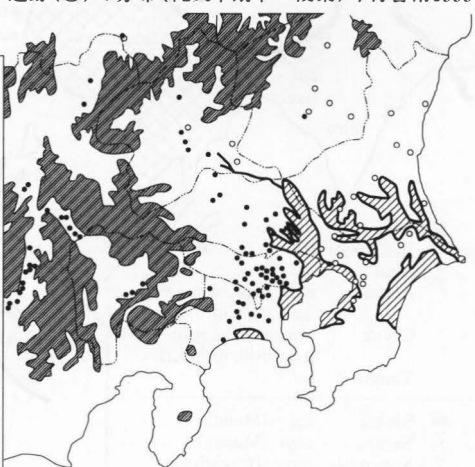


図4 湖沼名の語尾「～池」「～沼」

鏡味完二1958





図11  
ヤマイモの分布範囲

中尾佐助1966

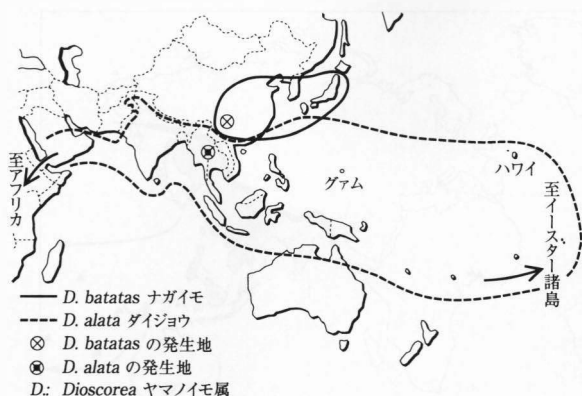
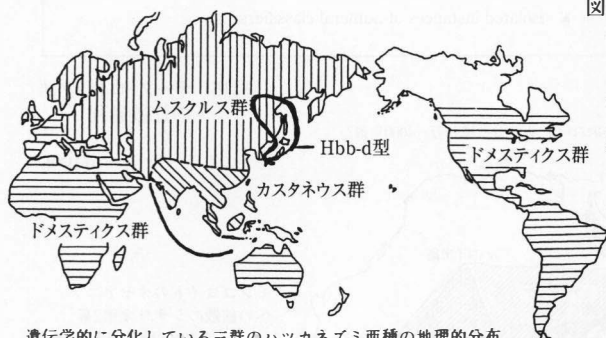


図12  
ハツカネズミ  
(キャストネウス群)  
(Hbb-d型を含む)  
の世界分布

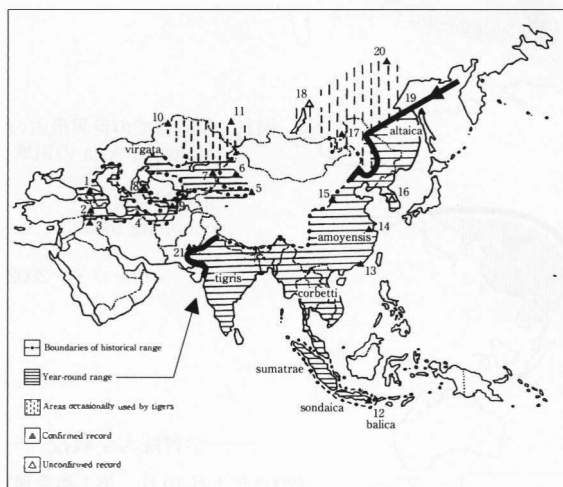
森脇和郎・米川博通  
1993



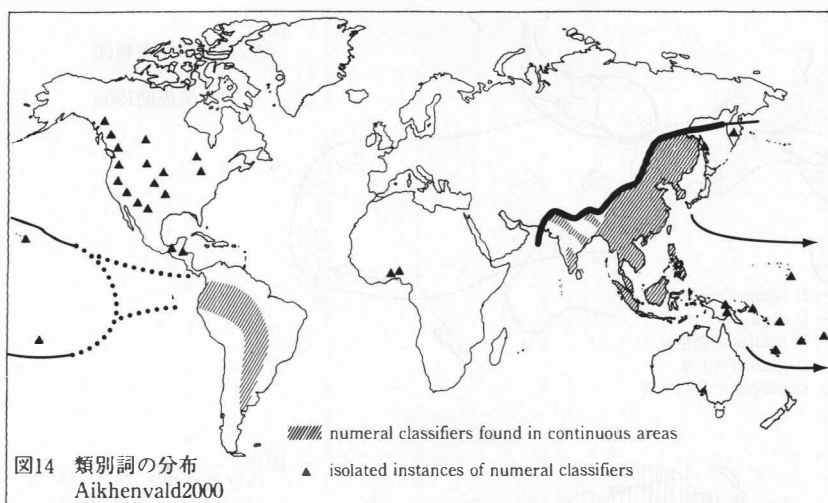
遺伝学的に分化している三群のハツカネズミ亜種の地理的分布

図13 トラの本来の生息地域

IUCN1996



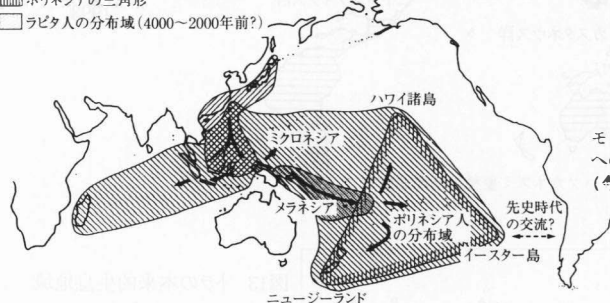
- Boundaries of historical range
- ▨ Year-round range
- ▤ Areas occasionally used by tigers
- ▲ Confirmed record
- △ Unconfirmed record



- “海のモンゴロイド” の拡散方向  
 ■ オーストロネシア系言語の分布域  
 ▨ オセアニアに拡散する以前の“海のモンゴロイド” 仮想分布域 (1万～4000年前?)  
 ▩ ポリネシアの三角形  
 □ ラビタ人の分布域 (4000～2000年前?)

図15 オーストロネシア語  
の拡散過程

片山一道1996



モンゴロイドのオセアニア  
への拡散のシナリオ第2幕  
(今から6000～2000年前ごろ)

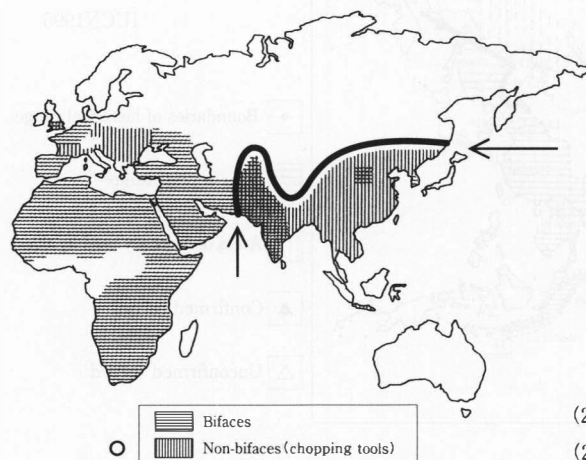


図16 現時点での世界最古の  
Monsoon Asia の領域

旧石器時代の  
chopping tools

ルーウィン2002

— 学習院大学教授 —

(2003年1月10日 第1稿受理)

(2003年4月10日 最終稿受理)